

大阪大学図書館報

Vol. 2 No. 3 May 1968

BGMアンケートまとまる

「今後もつづけてほしい」が 67%

前号でお知らせしたように、試験的に行なっていたバック・グラウンド・ミュージックに対するアンケートを実施したが、このほどその結果がまとまった。

実施日時 2月23日(金) 午前9時—午後5時

〃 場所 本館2階大閲覧室 座席数 320

回答数 配布用紙 450枚中 420枚 回答率 93.3%

調査項目 次のとおり()内は%

(1) 現在流れていBGMについて、どのように感じますか。

a 気分がやわらぐ	221 (27.8)	f 何も感じない	93 (11.7)
b 能率が上がる	71 (8.9)	g 何となく眠くなる	30 (3.8)
c まわりの騒がしさが気にならない	82 (10.3)	h 邪魔になる	43 (5.4)
d 注意力を集中される	165 (20.8)	i 騒がしい	23 (2.9)
e 雑念の発生を少なくする	55 (6.9)	j 頭痛がしてくる	11 (1.4)

これを上位から並べると、a気分がやわらぎ、d注意力が集中され、f何も感じない、c騒がしさが気にならない……となって、大体BGMの効果が出ているようである。

(2) あなたのまわりの騒音を、このBGM音楽が心理的に中和する効果(マスキング)を感じますか。

a 感じる	159 (38.3)	b 感じない	149 (35.9)	c わからない	107 (25.8)
-------	------------	--------	------------	---------	------------

(3) これからもこのBGM音楽を流してもよいと思えますか。

a 思う	269 (66.7)	b 思わない	39 (9.7)	c どちらでもよい	95 (23.6)
------	------------	--------	----------	-----------	-----------

以上、すべての設問に共通のことであるが、何も感じない、わからない、どちらでもよい、という中間的意見がかなりの比率を占めているが、大勢としては肯定的であった。

(4) その他の意見

主なものは、音量の調節、選曲などであり、また、騒音対策なら他にも方法があるろうというのもあった。

図書館改善の歩みと今後の問題点（二）

直 木 一 郎

次に現状施設の改善について言いますと、先に述べました玄関・廊下・事務用諸室などの面積の狭さから生じる各種の支障の解決は書庫の増築にかけることとし、現在三つの閲覧室のうち二つの大閲覧室は三面全体が透明ガラス張りであるため明るさが強いのと、面積が広く、全体が一望できるので解放感があり過ぎて、学生が落ちついた気分になれないようです。そのためか、閲覧室が騒がしいので一部の学生から苦情も出ています。騒がしい原因は学生控室のような考えで入館する者があるのと、幾組かのグループがそれぞれ閲覧座席に集まり教科書や参考書を開いて討論することです。掛員が常に注意しますが効果はあまり期待できません。もともと学友が集まり学習上の問題について話し合うことは有意義なことでもありますから、このようなグループのため幾つかの小集会室を図書館が持つことは必要であり、それが常識になっておりますが、現在のところその面積がありません。解放感過多を防ぐために部分的に低い天井を立てて仕切ったコンパートメントにし、ガラス戸にレースカーテンを掛けて外部からの光線を和らげ鎮静感を造出する必要があります。暖房は現在ガス・ストーブですが、いずれこの地区の建物を幾つかのブロックに分け、それぞれに集中方式による暖房装置ができることと思っておりますので、それに期待することにし、閲覧室の冷房はなるべく早い時期に実施できるよう望んでおります。

職員の量・質について

本館が39年までに関係部局の当時の現有職員の統合を完了し、その前、35年に第一期工事により建設された閲覧室・書庫を持ち、不完全ながら実態のある図書館として発足したことは先に述べたとおりであります。この時期の前後から本学も急に発展し、教養部の学生数は年々大量に増加していますし、関係部局の講座数や教官数もふえております。学部の学生数も同様です。学生数の増加は、これに比例して館内の閲覧・館外の貸し出し業務と文献複写量が増加し、講座や教官数の増加は研究用資料の受け入れ数の増大をきたしました。このような事情のもとで統合したままの職員数であったので、重要な作業がたいへん遅れたり、あるいは成すべきことが着手できない状態でした。たとえば研究用図書を受け入れてから整理を終えるまで数ヶ月もかかることが常態となり、大小の文庫本などで過去に受け入れたものが未整理のまま書庫に置かれていましたし、開架室のカウンターでは掛員が貸し出し・返却の業務に追われるため本の配架が遅れて利用者に不便をかけ、質問に親切な答えをしなかったため不満の声を聞いたこともありました。このような事情を事務局でも認識し、ここ数年来小人数ではありますが増員の措置をしてきました。この措置によって研究用や学生閲覧用図書の整備は、年度末に多量の冊数が一時に殺到するような場合を除いて数日間で終えるようになり、滞貨として存在した長岡元総長の遺本や旧南校から移した本も書庫にあるものは整理が終わりました。ただ後者の場合教養部の関係教官が移転の時から引き続いて研究室に収蔵している分は未着手でありますので今年の夏に整理する予定です。そのほかに小部数の文庫などが残されていますが漸次着手することにしてあります。人員に関連する恒常的業務で、もう一つ解決を要する問題にカードの配列があります。学生用図書を含めて年々30,000冊ほどふえる本が、1冊について閲覧用として、書名・著者名・分類の3種、事務用として、著者名目録と計4種類の体系に、カード

をそれぞれのあるべき位置に配列する作業です。これを毎日行うことなしには、閲覧・運用の機能を十分果し得ないもっとも基礎的な作業です。配列を要するカードの年間枚数は、30,000冊×4=120,000枚、年間執務日数300日として1日400枚です。この作業はたいへん単調で、しかも注意力を要し、疲労度が高いのです。そのため専従とはしないで、他の業務を行なっている人と交替で行らうようにして、1人の増員はどうしても必要になります。遺憾な事実ですが現状では、事務用としての著者名カードだけが完備されており、閲覧用には、目下分類カードの整備を進めていますが、そのほかはまだ着手する体制にはなっていません。この点に限れば、まだきわめてよくない図書館です。機械化による人力の節約ができそうであって、最もできにくいのが、カードの配列を含めての分類・目録の整理作業です。これらの作業の流れは、全部人手にたよるしか方法はありません。そして取扱量と人員とは密着しますので、利用者のために作業を精密にすれば、より多くの手数が掛かり、数量をこなすため手数を省けば粗雑になって利用者が不便を感じるという、二者択一の関係にあります。現在では残念ながら後者の方でしょう。本館全体の業務遂行の質をそれほど高くない水準に維持して行くだけでも、なおいっそう人員の充実が必要です。現在の状態でも定員不足を補うために非常勤(賃金)職員を8人も投入しています。このため経費の増大をきたしていますが背に腹は替えられぬ実状です。

次に職員の質の問題に触れますと現状の図書館では、職員は狭く深い学識より一般的な広い知識の背景が必要です。そのうえに語学(漢文を含めて)と図書館学が執務の直接の用具となります。それは、あらゆる学問の分野にわたって、各国語で書かれた刊行物を手掛ける必要があるからです。質の向上は結局各人の努力にかかわることですが、職場での研修も行なう必要があります。このため本館では計画を立てていますが、職員の仕事と時間の関係から、まとまったものはまだ実行に移されていません。

予算について

今の図書館運営に関する経常的予算は、(1)文部省からくる図書館維持費(42年度総計約575万円)、(2)本学共通経費で計上される運営費(42年度約165万円)、(3)部局分担金、の3本の柱で成りたっています。(1)と(2)は共通の経費対象に対し、同一のものさしで計って本館と各分館に配分しています。(3)は、(1)と(2)の予算ではとうてい足りませんし、各館の特殊事情による経費もあって、当該館の関係部局が必要に応じて直接に分担しています。大学全体の図書館の運営費を全額文部省からくる維持費でまかなえればよいのですが、とうてい望むことができませんので、不足額の調達方法について常に全国図書館長会議や、7大学の会議でも議題になります。しかし大学によって図書館の組織が違うので結論は得られません。本学では吹田地区に移転する部局の集結が完了し、新しい図書館ができたときに再検討する必要がでてくるかと思いますが、当分現状の3本立てがやむを得ないものと思います。本館の経費の対象を、その性格から分解しますと、(A)は本学全体に共通する図書業務の総括執行にかかわるものです。その内容は全学の外国雑誌の一括予約発注と代金の精算・支払、各種財団などからの寄贈申し込み図書に関する処理、どの分館にも所属させることを不適当とする寄贈図書の受け入れ整理・保管、学内図書および雑誌の総合目録の作成保管、国会図書館へ送付するカードの作成配列、他の大学・研究機関との文献の相互利用(医学関係は中之島分館で行なう)、図書館職員の人事事務と予算に関するものが主なものです。(B)は教養部学生を主とする学習図書館として閲覧に関係する経費です。これには施設の整備費や光熱水料、閲覧室の清掃費が大きなウエートを占めます。また学生閲覧用図書の発注整理に要する経費も含まれます。文科系学部学生数は従前少なかったのですが、最近大量に定員が増加したので今後は利用者もふえることと考えます。(C)は文科系部局および教養部の研究図書館としての業務に関係するもので、研究用資料の発注・受け入

れ、整理および支払い事務と文献複写が主なものです。以上3種の業務が総合されているので、図書館予算を各館に配分するに当たって、この点を考慮してあります。しかし必要な定員の不足を補うための非常勤職員の賃金は、図書館全体の予算をたいへん圧迫するので、各館を通じて配分の対象にしていません。そのため42年度から教養部学生増加に伴う図書整理と貸し出し業務の強化のための非常勤職員増員の賃金51万円を事務局から配分を受けました。しかし本館として前記(1)と(2)の業務について、さらに充実しなければならないものがあるので、定員の増員はもとよりですが賃金予算の増額を希望しています。

組織について

ここに組織上の問題点を述べます。本学に本館と四つの分館があります。そのほか表面は本館の分室と言う形ですが、おおかた独立して管理されている理学部と基礎工学部の図書室があり、さらに吹田地区に中之島分館の分室としての微研の図書室があります。また文科系部局にもそれぞれ、これに近いものがあり、理科系学部には学科の図書室もあって、図書館の組織はなかなか複雑です。できればこれらのものを適当な基準を位置づけし、図書館全体としてすっきりした体系にまとめて、組織化することが望ましいのです。そうでないと、図書館維持費の配分にも関係しますし、各種の統計や文部省の図書館に関する調査にも常に疑問が提出されます。しかし、ここで管理・運営の面に絞って当面の問題を考えますと、機能や規模が似ている薬学部や産研が分館であり、理学部・基礎工学部・微研が、まだ確立していない制度としての分室と言うことは一つの問題であります。薬学部・産研を含めて分館のほかには別の制度を学内で明確に作り、予算や人事の問題を含めての管理体制をはっきりさせるべきものと思います。図書館の改善に関する最も重要な問題が昭和39年11月17日付日本学術会議会長から佐藤内閣総理大臣に対してなされた「大学における図書館の近代化について(勧告)」に含まれています。その中で、施設の近代化と、要員の増強、予算の増額等の措置をとることを政府に要望し、中央図書館、分館ならびに各学部および研究所に設けられた図書館(室)等を総括して、集中制によると分散制によるとを問わず有機的・一体的に管理され、全学的に運営組織が確立されなければならないとし、このことは大学人の自主的努力にまつべきものと述べています。これは単的に現時点における図書館の改善策の基本的なものを表現しています。施設、人員、予算の点については本館に関するものを主として既に述べました。組織の改善は現時点でも行なおうとすればできることですが現実にはなかなか困難なことです。この解決には施設や人員と経費の負担と管理の責任について細部に到るまで館長——分館長——部局長との間の調整が必要ですし、部局の自主性の問題もかかってきます。このような根本的なことは今後も時間をかけて検討することにし、現実の問題を述べますと、本や雑誌はなるべく手近な所に置きたいとの研究者の要望はもっともなことであります。しかしそのため図書室が細分化され、そこで多量の本が本質的に管理され、はなはだしくなると独占化してきます。そうするとますます相互利用が妨げられ、図書館の重要な近代的機能に、ひびがはいてきます。このような状態を防ぐため手許にはなるべく少数にとどめ、後は部局単位の図書室に保管し、その図書室が図書館組織の一部にはいり、全体としての有機的運営に参加することを希望します。(おわり)

(前附属図書館事務部長)

国会図書館刊行書誌所在状況

国立国会図書館刊行の科学技術関係書誌が、本学では下表のとおり継続受入れていますので利用して下さい。なお、これらの出版物は大部分が同館の好意で寄贈されています。

誌名 所在	全般的な書誌				雑誌類の書誌				レポート類の書誌				主題別の書誌	広報誌		
	納本週報	全日本出版目録	蔵立国会図書館目録	洋書目録	科学技術記事索引	海外科学技術目録	逐次刊行物関係	日本科学技術関係	海外科学技術月報	資料力関係	原子力関係	外国厚子力機関	外国航空宇宙	文獻目録	P・B・A・D対照索引	数表総合目録
本館	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○	○
中之島分館					○		○	○	○	○	○				○	○
医学部																
歯学部																
微生物研																
蛋白質研																
工学部分館					○	○	○	○	○	○	○			○	○	○
機械・冶金・造船 電気・精密・通信等科													各1計6			
薬学部分館																
産研分館				○												
理学部図書室													○物理	○		
基工図書室																

No. 21
67. 12.

資料紹介(2)

National Library of Medicine. Index Medicus. New ser. Vol. 1 (1960)~(中之島分館所蔵)
 前世紀末、米国軍医図書館は世界的な規模で医学関係の図書、雑誌を収集し、それに対する索引事業に着手した。この事業は幾多の困難をのり超え今日まで続けられており、世界の医学研究者に多大の恩恵をもたらしてきた。その Index-Catalogue of the Surgeon General's Office, Index Medicus (1st ser.) 等が医学の進歩に対する“アメリカ医学の最も偉大な貢献の一つ”にあげられる所以である。1958年に国立医学図書館と改称されたこの世界最大の医学図書館は、米国内のみならず国際的な医学文献の処理機関として益々その重要性を高めている。Index Medicus (New ser.) はこの国立医学図書館の代表的な出版物である。世界各国の医学及び関連分野の逐次刊行物 2,500 種以上から年間約17万の論文を集め、それらを細密な主題別に分類して、関係テーマの論文を容易に探しださうように組織された月刊の索引誌である。特定の著者による論文の探索のために著者索引も附されている。収録文献の網羅度、収録文献の新しさ、主題索引の構成、使い易さ等の点で、医学文献の検索用資料のなかでは他に類がなく、膨大な量の世界の医学文献検索の鍵ともいふべきものである。1年分を累積した Cumulated Index Medicus も刊行されている。1963年国立医学図書館は MEDLARS (Medical Literature Analysis and Retrieval System) と呼ばれる電子計算機を中心とした医学文献の蓄積、検索組織の活動をはじめたが、同時に Index Medicus の充実にも着手した。それによると1970年に Index Medicus の収録論文を25万に増やし、その作製に要する日数を25日から5日に短縮する予定であるという。Index Medicus は今後も医学文献一特に外国文献一の検索上最も利用価値の高い必須の資料として発展を続けていくであろう。

■ 学部学生のための指定図書調査終了 総額5千万円をこえる

前号既報の学部学生のための教官指定図書についての調査は、予定より1ヶ月おくれで3月末に締切った。事前のPR不足と、現行の講義のシステムになじみにくいことから、調査票配布枚数740枚の53.2%しか回収できなかった。(内訳 文80 法37 経6 理43 医39 歯45 薬35 工60 基工49) 合計金額は52,604千円で、1冊当たり平均4,960円の指定書を一科目につき3種類ずつ(平均27冊)指定したことになる。

■ 指定図書購入費 予算化

教養課程の指定図書については毎年共通経費から配当される閲覧用図書費により、徐々に充実されているが、学部学生の指定図書、参考書は非常に貧弱である。宮地館長は、この点を憂慮し、今回の指定図書調査を機会に、是非、指定図書購入費を予算化するよう事務部に指示があった。一方、本年度の財政事情は非常に悪く上記の全額を要求できないので、とりえず1科目1種類に限った金額14,580千円を5ヶ年計画で整備することにし、初年度分2,916千円を予算要求し、みとめられた。

人 事

新事務部長に中野六郎氏

附属図書館の直木一郎事務部長は、3月末をもって停年退官した。新事務部長には4月1日付で中野六郎氏(前京都大学学生部次長)が任命され着任した。

日 程

- 5月14日(火) 日米大学図書館会議実行委員会 第1回(東京大学)
 " 17日(金) 図書館と資料室との打合せ 第2回(本館会議室)
 " 21日(火) 近畿地区国公立大学図書館研修企画委員会 第5回(大阪外国語大学)
 " 25日(土) 国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会(関西学院大学)
 " 下旬(予定) 図書館委員会(本館)
- 6月4日(火)~7日(金)
 全国国立大学図書館長会議 第15次(東京大学)
 " 中旬(予定) 豊中地区運営委員会(本館)

来 訪 者

- 3月22日(金) 名古屋大学附属図書館事務部長 男沢 淳 他1名
 " 27日(水) 東京大学附属図書館整理課長 田辺 広
 " 29日(金) " " 事務部長 佐竹大通
- 4月19日(金) 文部省情報図書館課大学図書館係長 田保橋 彬
 " 25日(木) 米国大使館広報文化局司書担当官 セオドア F. ウェルチ

あとがき 直木前事務部長をおくる

本学に在職39年間、その誠実な人柄と研究熱心な仕事ぶりで定評のあった直木前部長が、去る3月末で定年退官された。昭和40年4月、本学図書館に部長制が実施された際の初代事務部長として着任されてから3年間、建設期で問題の多かった附属図書館を有機的に結合してレールにのせられた功績は阪大図書館のあるかぎり不朽のものであろう。特に永年の会計マンとしての経験を生かしての本館の増築、維持費の合理的配分などに示された手腕は学内外の賞讃の的になっている。われわれは中野新部長とともに、直木前部長が敷かれた軌道を更に中広く、且、奥深く押し進めなければならない。前部長の今後の御健康と御活躍とをお祈りしてやまない。